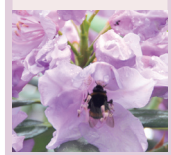
月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch
現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年　創刊29年目　Nr. 334
2017年5月号

CARL SPITZWEG 1808–1885　Der Sonntagsspaziergang（日曜日の散歩） 1841　Öl auf Holz　28,2 × 34,2 cm　Salzburg Museum　Foto: Salzburg Museum
Leopold Museum 『CARL SPITZWEG ― ERWIN WURM　Köstlich! Köstlich?』
レオポルト美術館　企画展『カール・シュピッツヴェーク ― エルヴィン・ヴルム』にて6月19日まで展示

杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 67



筆者が勤務する東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェント教育院（通称「道場」）では、文部科学省の支援により「人類の生存基盤を脅かす核拡散、核テロ、大規模な原子力災害や緊急被ばく問題等のグローバルな原子力危機」の分野において、国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的として、平成二三年度より修士・博士一貫プログラムを実施している。三月二八日、環境エネルギーイノベーション棟・多目的ホールにおいて、道場初の修了生である一期生三名による平成二八年度道場修了式がとり行われた。当日は、前東工大学長の伊賀健一氏とテレビ朝日報道局の松井康真氏から貴重なご講話をいただいた。

来賓からの祝辞に対して、修了生一人ひとりから、四年半にわたる大学院生活において、博士号が授与されるまでの苦労や内外インターンシップや研修などでの楽しかった話、科学技術や人間面での成長した実感、支援してくれた教職員への感謝の言葉が述べられた。本教育院初の修了生三名は、福島原子力発電所の廃炉対応など原子力関係の企業や公的研究所に就職した。式典では、本教育院関係者全員の署名入りの色紙を授与されるなど、参列した方々から暖かい声援を受け、本教育院の目標である「高い志を持って、人々のため、社会のため、世界のために貢献するリーダー」を今後実社会において身を以て実践すべく、三人とも自信に満ちて笑顔で羽ばたいていった。

http://www.dojo.titech.ac.jp/

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の楽器博物館について述べてみたい。ウィーンの新王宮内にある古楽器博物館は、ルネッサンス時代から現代に至るまでの楽器が十の室内に年代順に並べられている。ハプスブルグ家皇帝や有名な作曲家の時代背景がわかる展示になっており、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ショパンなどを知っているだけでも十分楽しめる。また、リュート、弦楽器、チェンバロ、クラヴィコード、木管楽器、金管楽器、オルガンばかりでなく、チロルのフェルディナント二世大公の珍しい楽器シリーズの展示も重要。鍵盤楽器のメカニズムを直接触って知ることができ、オーディオガイドでは音を聞かせてくれる。ハプスブルグ家のマリア・テレジアですら音楽にも詳しかったことがわかる。

一方、京都中京区にある雅楽器博物館は、雅楽器師・山田全二氏が一九八三年に自宅に開設した。千三百年も前から演奏されてきた雅楽は、世界最古のオーケストラと言われ、日本の宮廷音楽として大切に受け継がれてきた。本博物館では古代楽器、雅楽器、能楽器やその制作素材などを展示している。打物（太鼓類）、弾物（琴類）、吹物（笙〈しょう〉類）など雅楽器の全てを展示しており、演奏も聞くことができる。修学旅行のグループ学習では、手に取って体験でき、無形文化財選定保存技術保持者などが解説してくれる。雅楽器の素材に京都美山のかやぶき屋根に使われ燻され三百年を経た「すす竹」が使われている。この博物館は二〇〇六年、無形文化遺産に指定、認定されている。皇帝や天皇家が楽器文化の伝承に深く関わったことが似ている。

余談であるが、筆者がウィーン赴任中、古楽器博物館の存在は知らなかったが、昨年四月のウィーン出張時に訪問することができた。観光客が少なくひっそりとしていたが、展示品の迫力には圧倒された。今度京都に戻る時は雅楽器博物館も是非訪れてみたい。両市の楽器博物館を紹介できた幸運に感謝しつつ、訪問時に筆者が撮影した古楽器博物館内の写真を掲載させていただく。

■杉本純　東工大特任教授　前京大教授
元原子力機構ウィーン事務所長■